序

海外研究交流室が主宰する日本在住外国人シンポジウムは、2002年度で第四回を数えることとなった。第一回はバブル経済崩壊後の日本研究の実情について行われたが、第二回はコリア語圏に絞り、日本研究の現在について（『世界の日本研究2001』）、第三回は二十世紀の日中関係について（『アジア遊学』No.41、No.44）、いずれも韓国、中国からゲストを招いて開催した。第二回の総括論議で、もっとテーマを絞り、突っ込んだ研究会を行いたい、という希望が出され、関心が高まっていた「日本統治下の朝鮮」をテーマにすることを約束して、散会した。それを実現したのが、本報告書となったシンポジウムである。やはり、韓国からも研究者に来ていただき、「在日」の研究者の方々、そして日本人の研究者と報告・論議を行った。

ただし、前回のコリア語圏の研究者につづけて来ていただいたわけではない。実質的なオルガナイザーを日文研、助教授の松田利彦さんにお願いし、歴史学を中心にして、様ざまな立場の方がたに参加していただいた。第一線のメンバーが集まり、相当に、内容の濃い報告と議論が繰り広げられ、参加者の多くが、充実していましたね、との感想を残して帰られた。取材された新聞社の方も、丁寧な紹介記事を書いてくださった。

植民地近代化論の批判的検討、加害者―被害者図式の乗り越え、日本帝国史の一環としての朝鮮半島研究など、今後の基本となるような視点や立場、枠組が提出され、個別にも、これまでの研究枠を破る領域の開拓が数多く見られた。立場や意見の相違は、もちろん様ざまにあり、それゆえにこそ、活発な議論がかわされたわけだが、資料に基づき、事実の掘り起こしを進め、その方法や解釈をめぐる論議を中心に進めることができたため、今後の課題も、それぞれに明確になったと思う。実に、充実したシンポジウムであった。

参加者各位に、改めて、感謝の意を表したい。

2002年12月

国際日本文化研究センター・海外研究交流室長

鈴木貞美